

保育におけるソーシャルワークの存在状態に関する一考察

熊坂 聡¹

保育現場におけるソーシャルワーク（以下、SWと記す）の存在状態を分析するため、保育士の語りの逐語記録分析、その記録を用いたKJ法による統合、SW機能発揮状況に関するアンケート調査を行った。その結果、保育現場におけるSWは、連携や面談など直接の保育を離れた場面に存在している一方で、直接の保育活動と共にも存在していた。直接の保育活動の中で子どもたちの様子に啓発され、家庭機能をアセスメントし、SW機能発揮を指向し、SW機能を発揮していた。しかし、保育士はSWをあまり認知しておらず、深い介入に至らない場合もあった。

Keywords : 保育、ソーシャルワーク機能、介入

I はじめに

現職保育士にSWの視点と技術が必要であると研修会で伝えても、人手不足で通常の保育に忙しく、そのような難しいことはできないと片付けられてしまうことがある。しかし、保育実習巡回を通して保育者の実践を見ている私は、川村ら(2017)が保育者の実践のスキルの高さとそれがSWの専門的な理論やアプローチに根付いていることが多いのだけれども、そのことに気づいておらず、そのため自分たちの実践に不安になっていると指摘している点に全く同意できる。また、厚生労働省による保育所保育指針平成30年度改定の解説(2018)では、保育とSWの関係に関する項目は削除されたものの、その「第4章 子育て支援」を見ると、自己決定の尊重・地域の関係機関等との連携及び協力・保護者の希望に応じて個別の支援・ネットワークなどSWの機能発揮が期待される支援内容が挙げられている。また、保育実習の巡回で保育所長から子どもや保護者、保育の状況を聞くにつけ、その支援にSWの視点や知識・技術、働きが必要ないとは考えられない。そこで、保育現場の中でどのような形であればSWが機能できるのかを考えてみたいと思った。そのためには、そもそも保育現場の中にSWがどのような状態で存在しているのかを調べてみる必要が

あると考え、本研究を行うことにした。

II 研究の概要

(1) 研究目的

本研究は保育の中にSW機能がどのように含まれているか、その存在状態を明らかにしようとするものである。

(2) 先行研究

本研究に関連する2000年以降の文献を抽出し、保育とSWの関係および保育の中で発揮されるSW機能についての見解を検討することを通して、本研究の位置づけとSW機能分類表を使う理由を明確にする。

(3) 調査

①保育活動に関する聞き取り調査

- ・調査目的 保育の中におけるSWの存在状態を把握する。
- ・調査対象 T市保育士 (A氏：保育経験15年、B氏：保育経験10年)
- ・調査日 2018年11月(聞き取り：各90分)、2019年1月(データ確認と追加の聞き取り：各60分)
- ・調査場所 T市会議室
- ・調査方法 聞き取り調査(半構造化面接法)
ある一日の保育活動とその中でどのようなことを思い、どのように行動したかを語ってもらう。その語りを逐語記録にし、表1の様式によって

1. 宮城学院女子大学教育学部教育学科特任教授

SWの視点が含まれている、あるいは取り組んでいると考えられる場面を抽出し整理する。次にその場面が家庭機能アセスメント段階とSW機能発揮を指向している段階とSW機能を発揮している段階に分類する。SW機能については、鶴ら(2016)が公表している分類を用いる。なお家庭機能アセスメントは、筆者が今回の聞き取りを進めていく中でその存在に気づいた機能であり、独自に加えた項目である。

表1 SW機能に関するデータ集計様式

保育場面の逐語 記録から抽出	SWの視点、 取り組み	SW機能		
		家庭機能ア セスメント	SW機能発 揮を指向	SW機 能発揮

②SW介入の深さに関する質的調査

- ・調査目的 保護者支援における介入の深さを描く。
- ・調査対象 ①に同じ
- ・調査日 ①に同じ
- ・調査方法 KJ法

③SW機能の発揮に関する量的調査

- ・調査目的 SW機能発揮による介入の程度とその頻度を明らかにする。
- ・調査対象 宮城県T市公立保育所3施設の保育職員 61名
- ・調査方法 アンケート方式、郵送調査
- ・調査内容

質問は、回答者の基本情報、SW15機能（鶴宏史ほか：2016）の取り組みの必要性認識とその実行の有無、その実行の頻度（「たまに」「時々」「よくある」）、家庭機能アセスメントの有無と頻度、SWの認知程度について設定した。

- ・調査対象期間 2019年1月1日～2019年12月31日の一年間
- ・調査時期 2020年1月17日
- ・回収 2020年2月末日
- ・回収率 100%

Ⅲ 先行研究

1. 保育とSWの関係について

保育とSWの関係について、鶴（2006:65）は「保育内容・方法とソーシャルワークの関係は曖昧であり、理論的に一元化されていないことが明確になった。」と保育とSWの関係の曖昧さを指摘している。土田（2010:22）は「保育所がソーシャルワーク機能を実施することについて、理念としては合意しているが、どのように実施するか・どこまでが保育所の職務か、という実際面では様々な意見があることを確認した。」と述べ、保育におけるSWの実施方法・実施範囲について定まっていないと指摘している。しかし、門（2015:20）は「保育者はソーシャルワーク機能を意識せずに保育を行ってきたことが分かった。そのうえで、保育者の語りを分析してみると、ソーシャルワーク機能と同様の働きをしていることが抽出できた。」とし、保育士がSWを意識していないことを指摘している。澁野（2018:58-59）は「保育者や所園長たちが、保育ソーシャルワークをしている自覚はなかったとしても、保育現場では保育SWが常に行われ、必要に迫られて繋がりも少しずつ広がり、連携へと発展していることがインタビューを通して確認できた。」と述べ、実務的には保育士がSW機能を発揮していると指摘している。このように、保育の中にSWは存在するが、その存在の仕方は曖昧であり、その機能発揮の仕方については議論が続いているといえる。その中で、土田（2006:293）がエコロジカル・パースペクティブから「保育士が実際としてはケアワークのみを担当していてもソーシャルワークの視点を持ち、ソーシャルワーク実践が保育室内のケアワークと連続線上にあり、チームワークのもとで実践されることの重要性を再確認しておきたい。」と述べている。この指摘は保育とSWを分離して考えておらず、保育の中でのSWの存在状態を現実的に表していると考ええる。

以上を踏まえて、保育の中でSWはどのように存在しているのかを明らかにしようとするのが本研究ということになる。

2. 保育とSW機能について

蘇 (2008:82) は、日本社会福祉実践理論学会ソーシャルワーク研究会 (1997) の「ソーシャルワークのあり方に関する研究調査報告書」のSWの機能と役割として示されたSW機能11項目をもとに、保育所におけるSW機能の内容として7項目を挙げている。鶴ら (2006:1-8) も蘇と同様に日本社会福祉実践理論学会ソーシャルワーク研究会が作成したSW機能分類をもとに、機能ごとに保育の役割を具体的に設定し独自の保育SWの機能分類表を作成し、保育とSWに関する文献37本と照合して、SW機能を15項目に分類している。門 (2015:18) は、松岡らが示した11機能を用いて、それらが保育の中でどのように・どの程度機能を果たしているかを分析している。ただ、松岡らも日本社会福祉実践理論学会ソーシャルワーク研究会が作成したSW機能分類を参考にしている。以上を踏まえ、本研究では多くの文献と照合して作成された鶴らのSW機能分類表 (鶴宏史ほか：2016) を用いることにした。

IV 結果

1. 保育士の語りからのSW機能の抽出

(1) SW機能発揮の場面と場面数

①SW機能発揮の場面の全体

A保育士の一日の保育活動の語りに含まれるSW機能は、15機能中11機能と家庭機能アセスメントを合わせて場面総数は56であった (表2)。B保育士の一日の保育活動の語りに含まれるSW機能は、15機能中11機能と家庭機能アセスメントを合わせて場面総数は60であった (表3)。

②SW機能発揮の場面と場面数

A保育士の場合、SW機能発揮を指向する段階とSW機能を発揮する段階を合わせた場面数を見ると、子どもや保護者に直接的に介入する7機能すべてに該当する場面があり、場面数は36であった。間接的に介入する場面は8機能中4機能あり、場面数は11であった。そして、SW機能発揮に繋がっていく家庭機能アセスメント場面数は9であった。場面数が最も多いのは教育機能で、次に

連携機能、相談援助機能と側面的支援機能であった。

B保育の場合、直接的に介入する7機能中6機能に場面があり、場面数は34であった。間接的に介入する場面は8機能中4機能にあり、場面数

表2 A保育士のSW機能発揮の場面と場面数

区分	SW機能	SW機能 発揮指向	SW機能 発揮	計
直接的介入	調停機能		2	2
	代弁機能		3	3
	処遇機能	2	3	5
	相談援助機能	1	5	6
	教育機能	6	5	11
	保護機能	1	2	3
	側面的支援機能	1	5	6
場面小計		11	25	36
間接的介入	仲介機能		1	1
	連携機能		8	8
	組織化機能			0
	ケースマネジャー機能		1	1
	管理・運営機能		1	1
	スーパービジョン機能			0
	調査・計画機能			0
社会変革機能			0	
場面小計		0	11	11
場面合計		11	36	47
家庭機能アセスメント				9
場面総数				56

表3 B保育士のSW機能発揮の場面と場面数

区分	SW機能	SW機能 発揮指向	SW機能 発揮	計
直接的介入	調停機能			0
	代弁機能	1	7	8
	処遇機能	1	1	2
	相談援助機能	2	4	6
	教育機能	2	6	8
	保護機能	1	0	1
	側面的支援機能	2	7	9
場面小計		9	25	34
間接的介入	仲介機能	2	3	5
	連携機能		1	1
	組織化機能			0
	ケースマネジャー機能			0
	管理・運営機能			0
	スーパービジョン機能	1		1
	調査・計画機能			0
社会変革機能	1		1	
場面小計		4	4	8
場面合計		13	29	42
家庭機能アセスメント				18
場面総数				60

は8であった。家庭機能アセスメント場面数が18であった。場面数が多いのが代弁機能と側面的支援機能で、次に教育機能であり、いずれも直接的に介入するSW機能であった。全体を通して場面数が最も多いのが家庭機能アセスメントであった。

③SW機能発揮を指向する段階とSW機能を発揮する段階の区分

ここではSW機能発揮を指向する段階と、SW機能を実際に発揮する段階がどのような関係にあるかを確認する。まずA保育士の場合は、SW機能発揮を指向している場面が11で、SW機能を実際に発揮していると判断できる場面が36であった。B保育士の場合は、SW機能発揮を指向している場面が13で、SW機能を実際に発揮していると判断できる場面が29であった。いずれにおいても、SW機能発揮を指向している場面数に対し、実際に発揮していると判断できる場面数の方が2倍以上多かった。なお、この調査ではSW機能発揮がその保育時間帯の中で行われていたかどうかは確認できていない。

2. 保護者支援における介入の深さに関する質的調査

先の調査では、SW機能発揮による介入の深さについては確認できなかった。そこで、ここでは「保護者支援」について、先の逐語記録を用いて、KJ法を使ってその状況を描いてみた。保護者支援を取り上げた理由は、SW機能が総合的に発揮されやすい場面と考えたからである。

(1) A保育士

①KJ法A型図解（圧縮版）

A保育士の語りを逐語記録にして、保護者支援に関連すると感じられる内容をラベル化した。そこで得た97枚のラベルによって探検ネットを作成し、多段ピックアップを行って30枚のラベルを精選した。この30枚を元ラベルとして狭義のKJ法を行い「KJ法A型図解」（図1）を作成した。ここには元ラベルを除いた表札12枚によるKJ法A型図解（圧縮版）を示した。

②KJ法B型説明

最近の家族の形は変化してきている。兄弟で食べる物が違う、家族一緒のご飯の時間が少ないなどの状況があり、家族関係は希薄になっている。さらに、ご飯を食べてこないという声があり、家

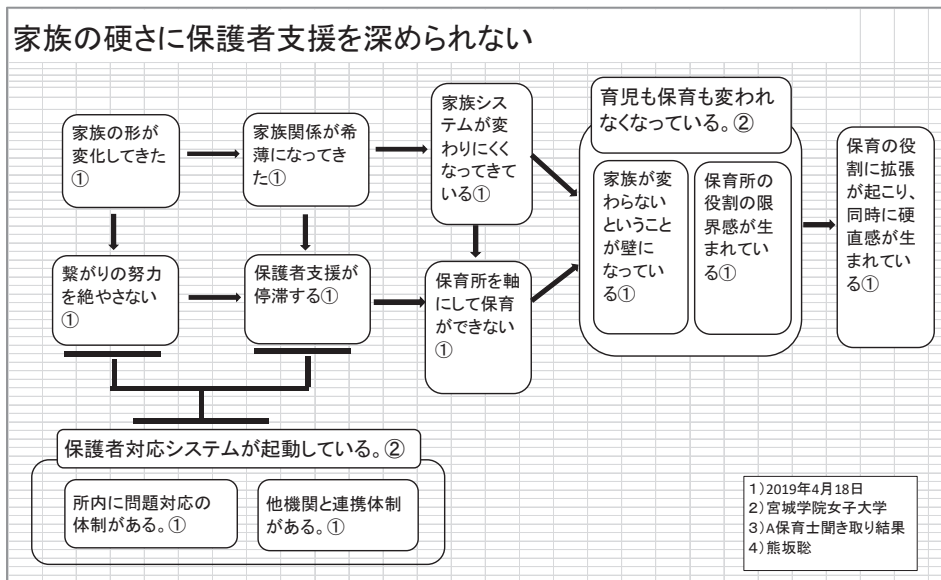


図1 A保育士の語りに基づくKJ法A型図解（圧縮版）

族側のリズムを大事にする方向になっているなど、家族システムは変わりにくくなっている。そういう中で保育所では保護者対応システムが起動し、保育士は繋がりの努力を絶やさないようにしているが、伝えても母親がどう感じるかわからない、そこまで家庭に求められないなど保護者支援が停滞し、保育所を軸にした保育(子どもの生活習慣の形成など)はできない状況にある。これらが循環し、家族が変わらないということが壁となり、保育の役割にも限界感が生まれ、育児も保育も変われなくなっている。つまり、保育の役割に拡張が起こり、同時に硬直感が生まれている。

(2) B保育士

① KJ法A型図解 (圧縮版)

B保育士の語りを逐語記録にして、保護者支援に関連すると感じられる内容をラベル化した。そこで得た132枚のラベルによって探検ネットを作成し、多段ピックアップを行って30枚のラベルを精選した。以下A保育士の場合と同様の方法で「KJ法A型図解」(図2)を作成した。

② KJ法B型説明

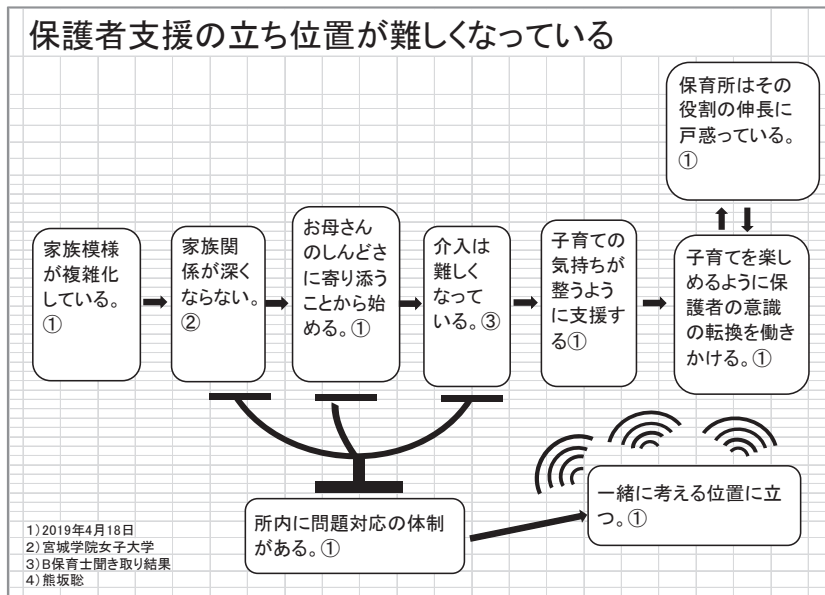
社会・仕事・家庭がどんどん複雑になり、生活リズムも余裕もバラバラになって、家族模様が複

雑化している。その結果、親が子どもと向き合えておらず、お母さんと子どもの関係が空回りして、家族関係が深まらない状況になっている。お母さんは子育てに使える時間が持てず、仕事を終えて疲れ、気持ちに余裕がないけれども頑張っている、お母さんのしんどさに寄り添うことから始めている。個別に介入しているが、介入は難しくなっている。この状況に対して、所内には問題対応の体制があり、保育士は様々な場面で一緒に考える位置に立って、子育ての気持ちが整うように支援し、最終的に保護者自身が自分を認めて子育てを楽しめるように意識転換を働きかけている。しかし、保育所はその役割が伸長していくことに戸惑いも感じている。

両保育士の語りをKJ法によって統合して見えてきたことは、保護者支援については介入が深くできているとはいえない状況にあるということであった。

3. SW機能に関するアンケート調査

ここではSW機能の存在状態を量的にも分析してみた。



1) 2019年4月18日
 2) 宮城学院女子大学
 3) B保育士聞き取り結果
 4) 熊坂聡

図2 B保育士の語りに基づくKJ法A型図解 (圧縮版)

(1) 基本情報

表3 勤務年数

2年未満	6
5年未満	3
10年未満	5
20年未満	11
20年以上	35
無回答	1
計	61

表4 現在の立場

保育士	52
主任保育士, 副所長など	5
所長	3
無回答	1
計	61

表5 資格

保育士	58
幼稚園教諭	37
社会福祉士	0
社会福祉主事	2
その他	0
無回答	3
計	100

表6 最終学歴

専門学校	21
短期大学	34
4年生大学	3
大学院	0
その他	1
無回答	2
計	61

勤務年数（表3）が10年以上の保育職員が75.4%であり、勤務年数の長い保育職員が多かった。現在の立場（表4）は、保育士が52名90%と回答者のほとんどを占めていたが、管理職・中間管理職も8名が回答していた。資格（表5）は、保育士資格所持者が58名95.1%であり、保育士資格と幼稚園教諭資格の両方を保持している保育職員が37名60.7%であった。最終学歴（表6）は、専門学校と短期大学卒業の保育職員を合わせると55名90.2%と最も多かった。

(2) SW機能発揮の必要性の認識と実行の「割合」

全体的には、SW機能発揮の必要性の認識に対し、それを実行した割合はほぼすべてのSW機能において低かった。直接的介入では、代弁機能と

相談援助機能において必要性の認識の割合と実行の割合が共に高かったが、調停機能と側面的支援機能では実行の割合が低かった。保育の中で対応しやすいなんらかの傾向があると考えられる。間接的介入では、仲介機能と組織化機能については、実行の割合がかなり低かった。日常の保育とは離れた対応になるからであると考えられる。スーパービジョン（以下、SVと記す）機能は必要性の認識が高く、実行の割合も高いが、これは業務の中でそういう場面が多くあると考えられる。

(3) SW機能発揮の必要性の認識と実行の「頻度」

ここでは、SW機能発揮の必要性の認識と実行の実態を詳しく把握するために、その頻度を分析してみた。アンケートでは、「たまに」を一年間

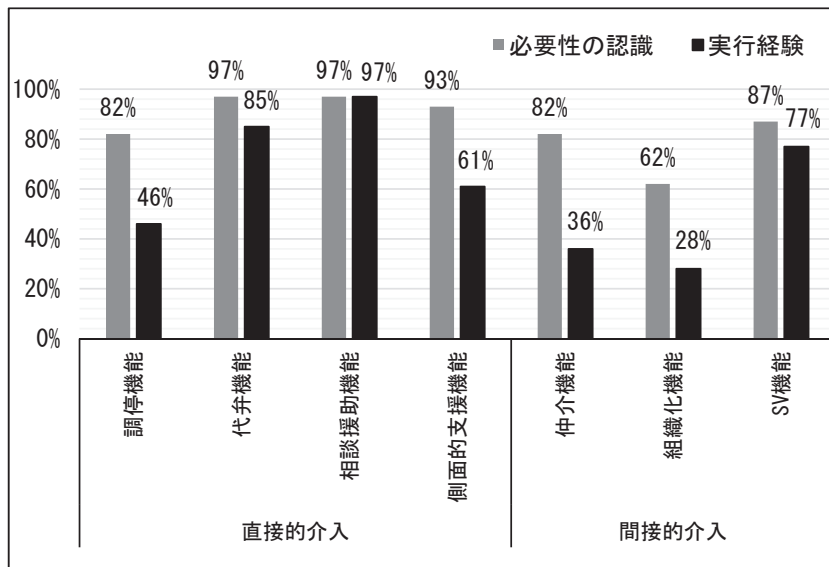


図3 SW機能発揮の必要性の認識と実行の割合

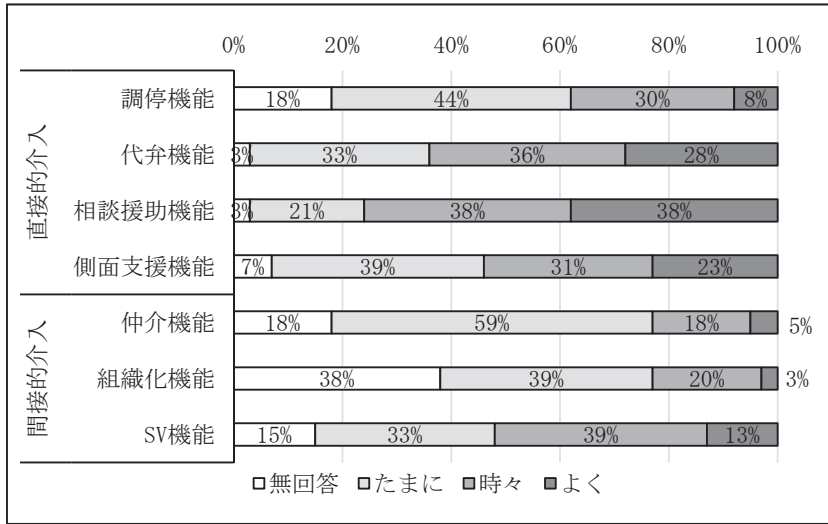


図4 支援が必要と思った頻度

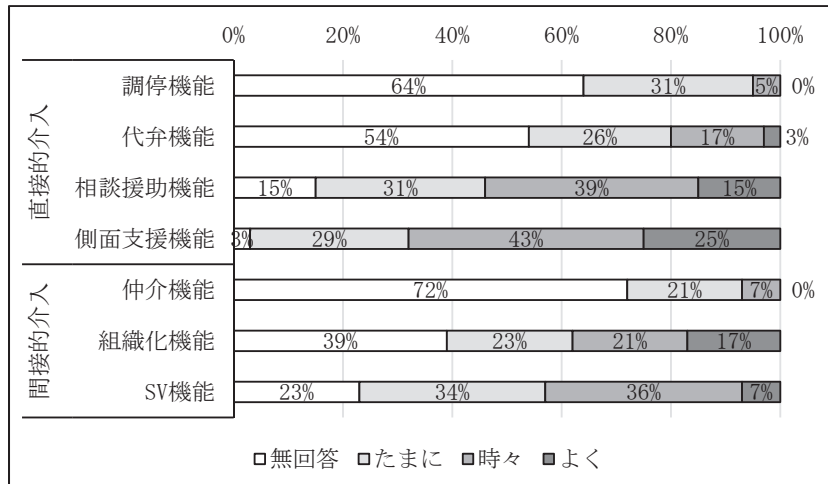


図5 支援を行った頻度

に1回程度、「時々」を3か月に1回程度、「よく」を月に1回以上と設定した。その結果、支援が必要と思った頻度（図4）に比べて、支援を行った頻度（図5）が低かった。また、支援が必要と思った頻度では、直接的介入の頻度の方が間接的介入の頻度よりも高かった。支援を行った頻度では、直接的介入と間接的介入の頻度に明確な差はな

かった。

次に、SW機能ごとに支援が必要と思った頻度と支援を行った頻度を比較してみた。調整機能と代弁機能は支援を行った頻度がかなり低かった。相談援助機能も支援を行った頻度が低かった。側面的支援機能は支援を行った頻度の方が高かった。仲介機能は支援を行った頻度がかなり低かった。

組織化機能とSV機能は支援を行った頻度がそれほど低くなかった。

以上により、頻度の面からみて、SW機能を発揮した支援の実態がさらに低かったと考えられるので、SW機能発揮の必要性の認識と実行の差の実態は、図3で示した以上の差が実際にはあると考えられる。

(4) SWの認知とSW機能発揮の必要性の関係

本調査では、SWの認知についても調査した。その結果、「知らない」が10名16%、「ある程度知っている」が45名74%、「よく知っている」が6名10%で、ある程度知っている割合が最も多かった。SWの認知がSW機能発揮の必要性の認識に影響を及ぼしている可能性があると考え、その関係を調べてみることにした。SW機能発揮の必要性の認識が高かった相談援助機能と代弁機能、そして最も低かった組織化機能について、クロス集計を行った。さらにクロス集計で生じた各群の人数の均等性を χ^2 検定で比較した。

①SW認知程度と相談援助機能発揮の必要性の認識

表7 SW認知程度と相談援助機能

		相談援助機能		合計
		有	無	
SW認知程度	ほとんど知らない	9	1	10
	ある程度知っている	44	1	45
	よく知っている	6	0	6
合計		59	2	61

クロス集計の結果生じた6つの群について均等性を χ^2 検定で比較した。その結果、 $\chi^2=141.13$ 、 $df=5$ 、 $p<.001$ であり、6つの群の人数が均等ではないことが示された。SWを「ある程度知って」いて、かつ「相談援助（としても）必要」と考える群の人数が相対的に多い（44人）ことが判明した。

②SW認知程度と代弁機能発揮の必要性の認識

表8 SW認知程度と代弁機能

		代弁機能		合計
		有	無	
SW認知程度	ほとんど知らない	10	0	10
	ある程度知っている	43	2	45
	よく知っている	6	0	6
合計		59	2	61

クロス集計の結果生じた6つの群について均等性を χ^2 検定で比較した。その結果、 $\chi^2=134.64$ 、 $df=5$ 、 $p<.001$ であり、6つの群の人数が均等ではないことが示された。SWを「ある程度知って」いて、かつ「代弁機能（としても）必要」と考える群の人数が相対的に多い（43人）ことが判明した。

③SW認知程度と組織化機能発揮の必要性の認識

表9 SW認知程度と組織化機能

		組織化機能		合計
		有	無	
SW認知程度	ほとんど知らない	3	7	10
	ある程度知っている	29	16	45
	よく知っている	6	0	6
合計		38	23	61

クロス集計の結果生じた6つの群について均等性を χ^2 検定で比較した。その結果、 $\chi^2=56.15$ 、 $df=5$ 、 $p<.001$ であり、6つの群の人数が均等ではないことが示された。SWを「ある程度知って」いて、かつ「組織化機能（としても）必要」と考える群の人数が相対的に多い（29人）ことが判明した。

以上のことから、SWを認知していることが、SW機能発揮の必要性があるとの認識になんらかの影響を与えている可能性が示された。SWを知っていることで、保育を通してSW機能発揮の必要性に気づくことにつながっている可能性が示唆されたと考えられる。

V 考察

以上の結果を踏まえて、保育の中でのSWの存在状態はどうなっているかを考察した。

SW15機能と家庭機能アセスメントの場面の有無と場面数の調査結果から、保育現場におけるSW機能の存在状態は、直接的に介入するSW7機能に該当する場面がまんべんなく存在し、場面数も多い状態であった。間接的に介入するSW8機能については場面に偏りがあり、場面数が少ない状態であった。つまり、保育という直接介入の場面に即してSW機能の発揮が指向あるいは実施されている場面が存在し、その場面数は多いと考えられる。しかし、家庭機能アセスメント段階からSW機能発揮を指向する段階が30%~50%の範囲で存在しているということは、SW機能を発揮する前の段階に止まった状態も一定の割合で存在しているといえる。

前述の調査結果からは、SWの機能を発揮してどの程度の深さで介入しているかはわからなかった。そこで、「保護者支援」を取り上げ、介入の深さをKJ法で描いてみた。その結果、保護者支援については介入が深くできていない状態であった。これは、SW機能全般の発揮についても介入が深くできていない状態の可能性を示唆していると考えられる。

次に、SW機能発揮の必要性を認識して、そこからどれくらいの割合で実行あるいは介入に至っているのかを調べてみた。直接的介入のうち、代弁機能と相談援助機能において必要性の認識の割合と実行の割合が共に高かったが、調停機能と側面的支援機能では実行の割合が低かった。間接的介入のうち、仲介機能と組織化機能においては、実行の割合がかなり低かった。これは、保育として通常行われている活動場面にSW機能が併存している可能性を示唆していると考えられる。さらに、SW機能発揮の必要性の認識と実行の頻度をみた結果、SW機能発揮の必要性の認識と実行の頻度には、その割合を比較した図3で示された以上の差が実質的にはあると考えられる。

SWの認知とSW実践の関係については次のような見解がある。澁野(2018:58-59)は先の引用でも述べていたように、保育者や所園長たちが保育SWを行っている自覚はなかったとしても保

育SWは行っているとしている。門(2015:20)は、保育者は日常の業務の中でSW機能と意識せず保育を行ってきたがSW機能を果たしてきたと指摘している。杉野(2019:95-96)は、保育者のSWに対する認知が半分にも及んでいないという結果が出ているが、多くの保育者がSWを実践しているのではないだろうかと述べている。また、米山(2009:57)は、SWを学習したことが十分に実践につながっていないと述べている。これらの見解は、保育現場の中ではSWが曖昧な認識のままに実践されているとする見解である。そこで、本研究では、SWを知っていることとSW機能発揮の必要性の認識との関係性を検証した。その結果、「SWの存在を知っていること」と「保育中にもSW機能発揮の必要性を自覚していること」との間にはなんらかの関係性があることまでは示唆された。

以上より、保育現場においてSWは、関係機関との連携や保護者との面談など、直接の保育と離れた時間帯に存在していると共に、直接の保育活動の中に存在していると考えられる。直接の保育活動の中で子どもたちの様子に啓発されて、家庭機能をアセスメントし、SW機能発揮を指向し、そしてSW機能を発揮している場面があるといえる。しかし、SW機能発揮を指向する段階に止まる場面、SW機能の発揮に至らない場面、そして深い介入に至らない場面があるのが実態であるといえる。

VI おわりに

関連する文献では、SWは保育の中に、保育と併存して、保育の連続線上にあるという見解があったが、SWはあまり意識化されてはいなかった。そこをもう一歩意識化できないかという思いもあり、SW認知と保育の関係についても調査したが、なんらかの関係が存在する可能性を把握するにとどまった。より蓋然性の高い結果を得られる調査を行ってみる必要がある。この関係性の調査については、本学教育学科特任教授の松浦光和先生にご指導いただいた。深く感謝申し上げたい。

また、調査に協力いただいたT市の公立保育所に勤務する保育職員の方々、2回の聞き取り調査に協力して下さった2人の公立保育士に心から感謝を申し上げたい。

なお、今回の研究は、平成29年度保育士養成協議会東北ブロック個人研究助成事業の助成金を受けて行なった研究の一部である。

学部紀要, 27(2), pp95-96 から要約.

- ・ 米山珠里 (2009) 「保育所にけるソーシャルワークに関する現状と課題：弘前市内の保育士に対するアンケート調査結果を中心に」, 東北の社会福祉研究, 8, p57 から要約.

<引用文献>

- ・ 川村隆彦・倉内恵理子 (2017) 『保育者だからできるソーシャルワーク』中央法規出版, 2017, p8 から要約.
- ・ 厚生労働省 (2018) 「保育所保育指針解説 第4章」, 18, pp342-360.
- ・ 鶴宏史, 中谷奈津子, 関谷芳孝 (2016) 「保育所における生活課題を抱える保護者への支援の課題」武庫川女子大学大学院教育学研究論集, 第11号, p4.
- ・ 鶴宏史 (2006) 「保育ソーシャルワークの実践モデルに関する考察 (その1)」福祉臨床学紀要, (3), p65.
- ・ 土田美世子 (2010) 「保育所におけるソーシャルワーク支援の可能性—保育所へのアンケート調査からの考察」龍谷大学社会学部紀要, (37), p22.
- ・ 門道子 (2015) 「保育の専門性と保育士養成の価値理念：ソーシャルワークの実践の場としての保育における保育士の役割を通して」東海学院大学短期大学部紀要, (41), p19.
- ・ 澁野順子 (2018) 「保育ソーシャルワークにおける『繋ぐ』機能の担い手の現状と可能性：TEA（複線径路・等至性アプローチ）による混成事例支援過程の分析」大阪総合保育大学紀要, (13), pp58-59.
- ・ 土田美世子 (2006) 「エコロジカル・パースペクティブによる保育実践」ソーシャルワーク研究, Vol31, No.4, 124, 相川書房, p41.
- ・ 蘇珍伊 (2008) 「保育所におけるソーシャルワーク機能に関する研究—保育士の役割に焦点を当てた質的内容分析」. 現代教育学研究紀要, 1, p85.
- ・ 鶴宏史, 中谷奈津子, 関谷芳孝 (2016), pp1-8.
- ・ 門道子 (2015), pp19-20.
- ・ 門道子 (2015), p20 から要約.
- ・ 杉野寿子 (2019) 「保育者のソーシャルワークに関する意識調査からの一考察」, 福岡県立大学人間社会学部